

---

# トモダチ

ユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トモダチ

### 【Nコード】

N8379W

### 【作者名】

ユウ

### 【あらすじ】

「あたしと翔太は幼馴染。なんでも言い合える仲だし、一緒にいてすごい楽。」

「俺と杏奈は幼馴染。多分俺らの間には恋愛感情なんて絶対生まれっこないだろうな。てか生まれてきたら困る。……のはずだったんだけどなあ。」

幼馴染の2人の恋のお話。



## プロローグ

小さいころ翔太と一緒に手をつないで帰ったことがある。

その時に

「翔太の1番好きな人はだれ？」

って聞いた。

そしたら翔太はしばらく考え込んで

「由里ちゃんかなっ」

って返ってきた。

あたしの名前が出てきたのは8番くらいで、その頃かなりませたあたしは翔太にむかついたことを覚えている。今思えばあたしだって翔太のことそんなに好きでもなかったのに、って笑えるけど。

でもまあこんな昔話は今になってはすごい助かっている。

どんな事をして翔太はあたしのことを好きにならないって知っているから。

だからあたしはかなり翔太を頼りにしてきたしなんでも話してきた。お互いほかに好きな人がいるし、なんでも言い合える仲だし、翔太といえるのはすごい楽だ。

翔太もそう思ってくれてればうれしいけど。

## 幼馴染 杏奈SIDE

マエハラショウウタ  
前原翔太。

バカでアホでどうしようもないムカツク奴。そんな翔太とはかれこれ10年くらい一緒にいる。

あたしと翔太が初めて会ったのは小学校の時。

保育所を卒業するとあたしは祖父母の家に近い学校に入学した。

親が離婚してお母さんが働きに出ているため昼は祖父母に預かってもらうことにしたからだ。

ただどあたしは保育所の友達と離れるが嫌だった。なんせその頃は人見知りする方だったから。

それでもやっぱり親の言うことには逆らえず、  
「引つ越ししないんだから大丈夫。」と宥められてしぶしぶ祖父母

の家に近い学校に入学した。

その学校は人数が少ないせいで全学年1学級だった。だから小学校6年生までクラスが一緒。

前行くはずだった学校は3クラスくらいあるって聞いたのに。車で15〜20分走るだけでそんなに違うものか、と驚いた。

で、入学して1週間。あたしは全くクラスになじめていなかった。

人見知りの方だったし、人に話しかけることができなかった。

そんな時だった。

「ねーねー！氷鬼こおりおにしない？」

そう話しかけてきたのは翔太。

びつくりしたけどすごい嬉しかったのを覚えている。

そして帰るときも翔太はあたしに話しかけてきてくれた。

「一緒に帰ろーぜ！！」

あたしはそれから翔太にくっついて歩いてた記憶がある。

あのころの翔太はすごい頼りがいがあったってかっこよかった気がするなあ。。。。

「牧屋!!」

「。。。。」

「牧屋!!!!」

「何さ。。。。せつかく人が昔の思い出に浸ってる時に。。。。」

「しらねえよ。お前の思いでなんて。」

今はコレだよコレ（笑）

中学校も小学校2つで1つのクラスとはいえ、やっぱり人数が少なくてずっと同じクラス。

そして奇跡的に同じ高校に入学したあたしたちは5クラスもあるのに奇跡的に同じクラスになった。

もう10年目だ。かなり見飽きた（笑）

そしてやっぱり人は成長するもので翔太もかなり生意気になった（笑）。さらにかっこよくもなったらしい。（あたしは全くわかんないけど、結構モテるらしい。）

バスケット部に入って急成長した身長はあたしより10センチ以上高い。クラスの中でもやんちゃなグループに入っちゃって。なのに頭はいいし。

思い切り青春しちゃってる。

「で、なしたの」

「ああ、ここの問題どついう意味？」

翔太が見せてきたのは塾の宿題のプリント。

「あー。ここは関係代名詞の。。。。」

「あ、これが。」

「そうそう。」

「さんきゅー。」

すぐ理解できるし。中学校の時にかなり勉強サボったくせに。もともと頭いい翔太は学年の30番くらいには入ってる。あたしは一応10番に入ってるけど。とりあえず翔太は何かとむかつくんだよなあ（笑）

でも

「てかさ。塾の模試、レベル高いし今回は特にむずかったんだからそんな気にならないからな。」

「は？」

「いや、お前氣にしてそうだったし。」

「なんでわかったの？」

「ま、長年の付き合いだからな。」

「はいはい、ありがとね。」

「じゃあドーナツおごって。」

「黙れはげ。」

「はげてねえよ！」

すじいじいやっ。

## 幼馴染 翔太SIDE

マキヤアンナ  
牧屋杏奈。

バカでバカで超バカで・・・とりあえずバカだ。

まあ俺の頭はそんなにあいつを簡単に表せる言葉が入っていないからバカとしか言いようがない。

あいつに出会ったのは小学校1年生の時。

「やけに暗くてさびしそうなやつ」が第一印象。

あいつが言うには「人見しりで話しかけれなかった」「らしいけど、あいつの辞書には人見知りって言葉はないと思う。

とりあえず、入学して1週間もたっているのに俺が見る限り友達はいなさそうだった。

だから俺は話しかけてみることにした。

そのときのあいつの顔、めっちゃ嬉しそうで、かわいいとさえ思っ  
てしまうほど。

(まあその時以来、あいつをかわいいと思ったことはないけど)  
それからあいつは俺の後ろをよくついてくるようになった。

そして時は流れ今は高校生。

俺と杏奈は同じクラスになった。小、中学校と人数が少ないためず  
っと一緒のクラスだったため、かれこれ10年も同じクラスになる  
もう、さすがに見飽きた。といってもなんだかんたんであいつは俺の  
幼馴染だし、友達だから一緒にいるわけだけでも。

だからあいつは俺にかなり気を許しているみたいだ。まあ俺も許し  
ているけど。

よくお互いで好きな人の話をしたり、愚痴とかいろいろ話してる。

多分お互い秘密をさらけ出していると思う。まあ10年も一緒にいれ  
ば隠すようなこともないか。

「ただ最近なぜか俺はよく女子に「杏奈と付き合ってるの?」って聞かれる。」

「そんなこと俺と杏奈の間には絶対ありえないことだ。」

「俺は杏奈のこと絶対好きにならないし、杏奈も俺のこと好きにならない。」

「だから今までこうして、いろんなことさらけ出てこれたんだ。」

「これからもそうなる。」と思う。

「で、最近あいつは少し元気がない気がする。理由はわかる。塾の模試の結果だ。」

「あいつは結構頭が良くて模試の順位もそれなりにいい。だからこそプレッシャーが結構かかっているんだと思う。」

「頭いいやつも結構大変だよな。」

「今回は一気に順位が20番くらい下がっていた。多分親か塾の先生にでもなにか言われたんだろう。」

「あいつ、結構わかりやすいから。だからかろく慰めてみた。」

「したら「ありがとう」ってあの時の笑顔で言ってくんの。別にかわいいとは思わないけどあいつはちゃんとお礼言ってくれるし、まあ・

・。結構いいやつだ。」

「翔太ーっ!」

「まあうるさいのがかなりの欠点だけど。」

「なんだよ。うっせーな。」

「うっせーな、とは失礼な!」

「で、なしたの。」

「ああ、はい。きつと困ってんじゃないかと思って。」

「渡されたのは頭痛薬。俺は頭痛もちでよく頭が痛くなる。確かに今日はちょっと頭が痛い。」

「あんたさ、なんでだか知らないけど頭痛いときよくドーナツ食べ」

たいてい言うの。それに今日調子悪そうだったじゃん？

あと・・・励ましてくれたお礼。ありがとね。」

「・・・おう。ありがとう。」

「どーいたしましてっ。」

そういつてあいつはそのまま中学校からの仲いいやつと教室を出て行った。

あいつはバカでバカでうるさくてとりあえずバカだ。

だけど、気がきくときもあるし、ああみえてちゃんと人のこと見てる。

それに俺はよく助けられてる。

あいつは本当にはかでどうしようもないやつだけどすごいいいやつだと思う。

ケチャップのみで。 杏奈SIDE(前書き)

ここからはほぼ杏奈SIDEになっています。  
更新遅くてすいませんm)——( m

ケチャップのみで。 杏奈SIDE

あたし恋に落ちました。

あたしと、翔太と中学校からの仲良し、水城理緒ミスキリオはいつも放課後は塾に直行する。

その前に必ず寄る塾のななめ向かいにあるコンビニ。

そこであたしは運命的とでもいえる出会いをした。

「いらっしやいませー。」

なんとなくそのコンビニで働いてる人と顔見知りになってきたあたしたちは声だけで

新入りかわかるようになっていた。（かなりすごいことだけど）

「理緒！この声新入りじゃない？」

「だねー。」

「お前ら誰だよ（笑）」

「翔太には言つてない。」

「うるせえチビ。」

「翔太も十分チビだけど。」

「水城がでかいんだよ。」

（ちなみに理緒は元バスケット部センターで身長は翔太を軽く越している。ということとはあたしと20センチは離れている。）

そんな会話をしながらいつものパンとジュースを買う。

（ちなみにあたしはスペシャルチョコスティックにリポトンのミルクティーにアメリカンドッグをいつも買っている。）

そして3人でレジに行った。最初は片方しかレジがあいてなくて理緒の後ろにあたし、あたしの後ろに翔太という順番で並んでいた。その時だった。

「すみません、お待ちの方こちらへどうぞ。」  
あたしは呼ばれた方を向いた。そしてその瞬間、  
恋に落ちた。

理緒の身長も余裕で超えるくらい、多分180?は余裕であるその  
身長に小さな顔に大きな目。

ひよろつと長くていかにも草食男子って感じ。少しマツシユ気味の  
茶色い髪が白い肌によく似合っていた。そして優しそくに微笑む姿  
もまた何とも言えなくて……。

あたしは少し固まってしまつて、気が付けば翔太に先にレジを越さ  
れていた。

急いでその店員さんがいるところに行く。

「ちよ、なに抜かしてんの!」

「お前がぼーつとしてるからじゃん。」

翔太は店員さんにお金を渡しながら言う。

「んなこと言われたつて……!」

「別にちよつと遅くなるだけじゃん。変わんねー、変わんねー。」

翔太はそう言つてお釣りを渡され後ろの方へ行つた。

あたしは店員さんを見た。

「いらつしゃいませー。」

……近。やつぱかっこいいい。

「あの、アメリカカンドッグください。」

ドキドキしながら言う。やばい顔赤くなつてないかな。

「マスタードつきとケチャップのみ、どちらにいたしますか?」

「あ、ケチャップだけで。」

そついうと店員さんは微笑んでアメリカカンドッグを取り出した。

「え、何お前マスタード食べれないの?」

翔太が話しかけてくる。

「……知つてるくせに。」

「わざわざもからしもマスタードも苦手なんだっけ？」

「そうですねけど何か。」

「何も辛くないのにー。」

会計を済ませた理緒もこっちにくる。

「無理。あのツーンとする感じとか！」

「ガキ」

見事に2人の声がそろつ。

「なっ……。」

「305円になります。」

用意していたお金を店員さんに渡す。

そのときネームプレートをちらつと見た。

『築波裕樹』つくばゆうき？ひろき？

最後に目があった。

営業スマイルで微笑まれただけなのに、すごい嬉しかった。

コンビニをでてすぐ理緒が

「あんだあのタイプでしょ？」

と言ってきた。

「え、なんでわかったの!？」

「やっぱりねー。だってあんだ趣味悪いし、ひよろつとした人好きだし。」

「あたし趣味悪くないんだけど！」

「え、誰だよ。」

翔太が聞いてきたけど無視した。

「筑波さんっていうんだって！めっちゃかつこよかったあ。」

「もう名前まで知ってるし……。でも背大きくない？なのに顔小さいし、キモイ。」

「理緒って趣味おかしいよ。てか目おかしい。」

「杏奈に言われたらおしまいだわ。」

「失礼な。」

「おい無視すんな。」

「うるさいな。あの店員さん！めっちゃかっこいくない？」

「そんなよく見てない。」

「めっちゃイケメンだった！」

「んなこと言ってるって好きになっちゃまうぞ。」

翔太が言う。

あたしはかっこいいと言っていた人をそのまま好きになってしまっ  
癖がある。

「もう好きだわ。」

理緒はため息をついた。

「あんたって……。」

「いやマジでマジで！」

本当にあの人を見た瞬間「運命だ」って思った。

「やばいあの人めっちゃかっこいい……。」

牧屋杏奈、恋に落ちました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8379w/>

---

トモダチ

2011年10月30日02時18分発行